法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-12

オモロの美称語

島村, 幸一 / SHIMAMURA, Koichi

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
359
(終了ページ / End Page)
394
(発行年 / Year)
1996-02-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002608

オモロの美称語

島村幸一

はじめに

オモロには、「異名」（「言葉聞書」）といわれるものが多く出所する(1)。オモロの場合、「異名」とはあるものを別の言葉で言い換えたものというよりは、別の言葉で誉め称えて表現したもの、すなわち美称語だと考えられる。それが様々に出所するのである。

ところで、当然この「異名」にあたるものは、他の歌謡類にもみることができる。例えば、米（御酒）の〈生産叙事〉を謡った有名な沖縄本島玉城村百名の「アマウェーダ」でも、牛を「足高／角高」と表現しているし、出来た稲を保管する蔵を「五俣／六俣」などと謡っているのである。奄美諸島で唱えられる「ハブグチ」（『南島歌謡大成　奄美篇』）(2)等をみるとハブを直接指し示す言葉はなく、「あやきまだら／くしきまだら」（綾き斑／奇しき斑）、「ふたまた」（二股）、「長むん」（長物）、「あやなぎゃいしゅきょら」（綾長いしゅ清ら）、「あやなぎゃ／おおなぎゃ」（綾長／青長）、「あ

やくぶすめーれぐわ」（語義不詳）というように別の語で表現されている。金久正の『奄美に生きる日本古代文化』[3]によれば、「この語（ハブという語、筆者注）は、めったに口にされないようである」として、これに出会った時は「『これがいる、これがいる』と人差指を曲げて波布の格好をして、相手に知ら」せ実名を口にしないようにするといい、それを口にする場合は「ハゴ（恐ろしい嫌なものの意）ワロ、シュウムシ（性の悪い物）、ガブ（株）三角」や「ナガムン」などというと述べている。長田須磨『奄美方言分類辞典』[4]でも、ハブの「忌言葉」として「マジムン」「アヤクマダラ」「ウとぅルシャムン」をあげており、ハブに咬まれることを直接的には表現しないとして「ハブアたり」（ハブ当たり、障りに当たる意だという）といういい、ハブに気をつけようということも「間接的」な表現で「アシムトゥヌアブナサリ」（足元が危ない）などというと記している。これについて、長田は、「ハブは人々に恐れられ、神聖視されているので、ハブに関する忌言葉が多い」と述べている。ハブはこのほかにも、宮良当壮『八重山語彙』[5]に「マームヌ」（真物）、「ショームヌ」（精物か、金久のいう「ショウムシ」につながる）、仲宗根政善の『今帰仁方言辞典』[6]に「ナガームシ」（長虫）などの用例を拾うことができ、全琉にわたって「忌言葉」が使われていることが想像される。咬まれる場所によっては二三時間で命がなくなってしまうという毒蛇ハブは、神の使いとして恐れられ、また敬われ、そのために直接的な表現を避けた「忌言葉」が使われているということなのだろう。

また、ネズミも伊波普猷が「あまみや考―大和文化南漸の跡を辿る―」（『日本文化の南漸』昭和

14年）で、柳田国男が「鼠の浄土」（『海上の道』昭和36年）で問題にしたように、これも様々な「忌言葉」で表現されている。『歌謡大成　奄美篇』には「鼠のタブェ」などがあり、これらに「をぅどぅりゃとのぎゃ」（語義不詳）、「やんぬしかみさま」（家主神様）、「はなぎや」（鼻長）などと出てくる。久米島の『仲里旧記』にも「びゝきや／尾長」と出て来、ネズミも作物を害するものの代表として恐れられているのである。これについても金久正は「古老などは、今でも鼠が家中で、ひどく暴れる時は、ネヅミとかジャコとかの実名を口にしたり、悪口をいったりすると余計暴れ出すから、ウェンチュ（上の人）とかウェヘガナシ（上掛加那主）とか呼ばねばならぬといっている」と書いている。いくつかの方言辞典をみると「てヰンジョヌジュー」（天井の主）、「てヰンジョヌアシェクヮ」（天井のお嬢様）、「っウヰヌチュ」（上の人、以上『奄美方言分類辞典』）、そのほか「えンちュー」（親人、『今帰仁方言辞典』『沖縄語辞典』[7]）、「ウヤザ」「ウヤンチュ」「ウヤントゥ」「オイザ」（いずれも親人の意）、「ドゥミ」（嫁、以上『八重山語彙』）、さらに宮良の『採訪南島語彙稿』[8]でこれ以外のものを補うと「ユムヌ」（夜の物、但し誦む者か）、「ウェーキ」（富貴）「ウェーキガナシ」（富貴加那志）をみることができる。中本正智が「鼠は神の使いだとされ、鼠にいたずらすると、夜間被害を受けると恐れられた。また鼠が普段と違った騒ぎ方をすると、不吉の前兆であると恐れられた」[9]と記しているように、これもハブ同様、神の使いとして恐れられ敬われていた。そのために、多くの「忌言葉」をもっているのである。

さて、オモロの用例はどうであろうか。先にも述べたように、「異名」は別語によって対象を誉め称えているという性格が強い。それは、オモロが死や疎まれ恐れられる負の世界といったものをほとんど謡っていないこととも関連しよう。例にあげた「ハブグチ」や「鼠の夕べェ」にみたように実名を口にすることへの強いタブー性がそこにあるというわけではないのである。しかしながら、他の叙事的な歌謡と比べるときオモロに出てくる「異名」は相当に多いということが出来る。オモロは「異名」、美称語を発達させているウタだということができるのである。

〈一〉

はじめに、船（「おうね」、方言ウーニ）の「異名」の例をあげてみる。

〔例一　一三―八七八〕(10)

しより𛀁とのふし　　　しより𛀁とのふし
一やまのくにかねか　　一山のくにかねが
なてゝおちやるこまつ　　撫でておきたる小松
あんしおそいに　　　〔按司襲いに
世かほうせち　みおやせ　　世果報セヂ　みおやせ〕
又ほこりころかまか　　又誇りころがまが

ともまさり　けらへて　　艫勝り　げらへて
又ほこりころかまか　　又誇りころがまが
しまとつけ　けらへて　　島届け　げらへて
いてらかす　　（出ら数
そてたれて　はりやせ　　袖垂れて　走らせ）

オモロは船の〈生産叙事〉歌である(11)。神女「山のくにかね」が慈しみ育てた小松が生長し、それを船材として「誇りころがま」が「艫勝り／島届け」を造ったというものである。オモロには二つの反復部があって、一つ目は船に乗せて国王「按司襲い」に世を豊かにする霊的力「世果報セヂ」を奉れというもの、二つ目は出来た船が出航するごとに海上を滑るように航海してほしいという航海の安全を願ったものである。ウタに、対句のかたちで二つの船の「異名」がでてくる。「艫勝り」と「島届け」である。「艫勝り」は後述するように、船の部分を称えて船全体を美称した命名、「島届け」は方言「トゥヂキン　届ける。先方へ届くようにする。ことづけて届ける」（『今帰仁方言辞典』）の語幹であり、古語「とづき　①（目標とする所に）至り着く。②（限界と思われる所に）立ち至る」（『岩波古語辞典』(12)）の語幹と関連する語だろう。艫の優れたもの、到着地に無事に行き着くことのできるものというのが、この船の「異名」の意味である。いずれも言葉を換えて船のすばらしさを称

えているのである。オモロには、こうした船の「異名」がたくさん登場するのである。
オモロで船は「あちおうね」（按司御船）、「おやおうね」（親御船）、「けすおうね」（下衆御船）、「せとしないおうね」（船頭撓い御船）、「たまよせおうね」（玉寄せ御船）などと様々な修飾が付けられて登場するほかに、以下に示すように「異名」でも多様に出所するのである。あくまでも便宜的な分類だが、命名の種類によって整理してみると次のようになる(13)。

①ゑそこ（良底、一―一七他）、ともまさり／しまとつけ（艫勝り／島届け、一三―八七八）、いたきよら／たなきよら（板清ら／棚清ら、一三―九四八他）

②はきあかり（接ぎあがり、九―四九九）、たまておりや／しけておりや（玉手織りや／しけ手織りや、一三―七九六他）

③はねうち（羽撃ち、一〇―五一六）、はねうちかま（羽撃ちがま、一三―九〇一）、こはいふさ（小隼、一三―七六〇）

④おうねのきみ（御船の君、一三―七五一）、わかきみ（若君、一一―五九四他）

⑤うらよせのもとろ／うらひちめもとろ（浦寄せのもどろ／浦治めもどろ、一―三一他）、ふなもとろ／はやもとろ（船もどろ／早もどろ、一三―九二六他）、うらとよみ／うらまわり（浦鳴響み／浦廻り、五―二七九）、きみとよみ／うきとよみ（君鳴響み／浮き鳴響み、一三―八五五）、おきめつら（浮き珍ら、三―九七）、たまめつら（玉珍ら、一三―七五八）、うききよら（浮き清ら、一

三ー七九二他)、なみとゝろ/うみとゝろ(波轟/海轟、一三ー八四七)、とくまさり(徳勝り、一三ー七五八)、もゝゑらひ/やそゑらひ(百選び/八十選び、一〇ー五三八)、うけたから(浮け宝、一三ー七六五)

取り出された船の美称語は、三〇にも及ぶ。このなかには、あるいは固有名詞として使われている用例はないとは断言できないが、オモロは基本的に一回性の歌謡ではなくある時期繰り返し謡われたウタだと考えられることから、地名にかかわるものや人名にかかわるもの(これも、あまり固有名詞的ではないが)を除いて、固有名詞的な語は少ないと思われる。しかも、対句で出てくる例があることで知られるように、オモロはある対象物が言い換えられて表現されていることが多い。したがって、これらの語は固有名詞的な語ではなく、基本的には船を称えた語、すなわち船の美称語だと考えられよう。このほか、「ーとみ」の形で「*しまうち(内)とみ」(島討ちとみ)、「ておりとみ(てよりとみ)」(手織りとみ)、「*せい(せ)やりとみ」(精遣りとみ)、「世ひきとみ/*せちあらとみ」(世引きとみ/せぢ新とみ)、「*世つきとみ/*くもことみ」(世着きとみ/雲子とみ)、「まやいとみ/*おしあけとみ」(舞合いとみ/押し明けとみ)、「*あまへとみ」(歓へとみ)、「*ちやくにとみ/世ゝせとみ」(大国とみ/世寄せとみ)、「すゑのすへとみ」(精の精とみ)、「まさりとみ」(勝りとみ)、「すつとみ/はやとみ」(鈴とみ/早とみ)、「こかねとみ」(黄金とみ)、「せりきうとみ」(宣り子とみ)、「*ふさいとみ」(相応いとみ)、「なむちやこかねかくとみ」(銀子

黄金かくとみ)、「*世もちとみ」(世持ちとみ)、「しないとみ」(撓いとみ)、「かほうとみ」(果報とみ)、「はねうちとみ」(羽撃ちとみ)、「やらいとみ」(遣らいとみ)の用例が二五もあって、これらも美称語の用例に加えてもよい。しかし、「―とみ」は「軍事的・交易体制的・行政的性格を有する古琉球独自の組織編制であった」[14]と推定できる十二引(ヒキ)それぞれの固有名称(十二ヒキと同じ名称には*印をした)でもあるので、対象から一応はずした。しかし、これを除いても「船」の美称語は前述したごとく三〇にも及んでいる。以下、分類別に解説してゆく。

①は、船の部分名称(船底、艫、棚板)を「良(ゑ)し」や「勝り」、「清ら」で誉め称えて、全体を美称した命名である。

②は、〈生産叙事〉(ここでは造船の〈叙事〉)を意味する語、接ぐ、手織る(手折る)にちなんだ命名であろう。「―ており」(「てより」の表記もある)は『おもろさうし辞典・索引』によれば、「天降り」と解釈されているものだが、そうならば「ておれ」または「天おれ」と表記されるはずであり誤りだろう。手織り(手折り)も、決定的な解釈ではないが表記上の可能性がある。織るは石垣を築く表現として「いしらこはおりあけて/ましらこはつみあけて」(石らこは織り上げて/真石らこは積み上げて、三―九一他)がある。棚板などを接ぎあげてゆくことをこのように表現したのであろうか。〈生産叙事〉が始原的に神の行為にかかわるものとしてあることを考えると、織るという語そのものが神の手、もしくは神女の手によってものが作り出されることを示した特別な表現だと考

えることができる。「―あかり」は、それが完全に出来上がった状態を意味する接尾語（いわゆる補助動詞）、「たま／しけ」は接頭美称辞、「―ておりや」の「―や」は、～するものを示す方言である。「―とみ」の例にも「ておりとみ（てよりとみ）」がある。

③は、船を鳥（猛禽類）のイメージで表徴する独特なオモロのイメージに由来した命名である。「こはいふさ」は、まさに隼に由来した美称語である。「はねうち」は、「はねうちしちへはりよるきよらや」（羽撃ちして走居る清らや、一三―九二四）があるように勢いをつけて走る船にちなんだ命名であろう。「―かま」は親しさや小さなものを表す接尾辞（方言、ガマ）である。「―とみ」の用例には「なむちやこかねかくとみ」がある。「かく」は語義不明だが、これは鷲と対句になっている語（二一―一四四五）。これも鳥のイメージで船を命名した例である。他に「はねうちとみ」もある。そのほか、「まやいとみ」も船を鳥にイメージした命名だろう。一三―七五四に「ふれたかのまやうやにきよらや」（群れ鷹が舞い合う様に清らや）がある。

④は、これもオモロ独特の想念の世界にかかわる命名で、船を神女としてとらえるイメージに基づく美称である。すなわち、オモロでは船は鳥のイメージでも神女のイメージでもある。「きみ」（君）は、ノロ（祝女）と区別される一段格の高い神女。二つの美称語は、その「きみ」に由来している。船を神女のイメージでとらえる幻想は、琉球弧に古くからあったものらしい。宮古や八重山に伝わる「いきぬぷーじとぅゆみやーのアーグ」や「いきぬぼうじぃゆんた」などは、役人から求愛された美

女が結婚を拒み山に逃れたがそこで死んでしまうが、亡骸から木が生えその木を船材として船を造ると立派な素晴らしい船になったという物語が展開されている[15]。これらのウタは、女性（神女）と船とが重ねられて幻想された船の起源神話なのである。「きみ」に由来する船の美称語は、琉球弧の古層の神話にさかのぼることができよう。本稿では全て神女名と考えるのが妥当だとしてとらなかったが、『辞典』では「すつなり」（一三―七八〇他、鈴鳴り）を神女名としているとともに船名ともしている。このほか、一応⑤に分類しておいた「きみとよみ」も船の美称語とともに神女名（一二―六七七他）でもある。そのような解釈が出てくるほどに、船と神女の表現が接近しているのである。それは、船が神女のイメージでとらえられ、神女に由来した命名になっているからだと考えられる。「―とみ」の例では「せりきうとみ」がある。「せりきう」（宣り子）は、神女名である[16]。

⑤は「もとろ（もとる）」「とよみ」「めつら」「きよら」「とゝろ」「まさり」「ゑらひ」「たから」が下接して、美称語を形成した例である。「もとろ」は「もちよる」「もちろ」と関係する語で、「もちよろ」の注記（いわゆる「言葉聞書」）には「清らかなる事」「きよらさの事なり」があり、オモロ語を多く収録した古辞書『混効験集』にも「きよらか成事なり」とある。この語は「なむちやこかねもちろきゆるきよらや」（銀黄金もぢろき居る清らや、一八―一二七〇）や「しまうちせちもちよろ」（島討ちセヂもぢよろ、一―三四）があるように、金属的な輝きや霊的な力の発散している状態をいう語である。用例には首里城内の聖域、「けおのうち」（京の内）の対句を「もちるう

ち」としたものもあって、これも霊力溢れた場所をいう語の美称になっている。「もとろ」は、霊的な輝きの発散を表現した語であろう。それが、下接して美称語になっているのである。「とよみ」は鳴響むの名詞化したもの。元来は、例えば「中くすくあつるうらとよむつゝみ」(中城在つる浦鳴響む鼓、二―五二)があるように響きわたるという意があるのだろうが、用例として名高いぐらいの意で使われているものが多い。動詞としての用例はもちろん、本例のように下接の美称語として、また「とよむあおりやへ」(鳴響む煽りやへ)、「とよむおゑさと」(鳴響む上里)のように人名や地名を称える接頭語としても、頻繁に登場する語である。この語は琉球弧に広くみられることから、古い歴史をもった言葉であると思われる。「めつら」は「めつらしや」(珍し)の語幹。注書に「きよらさといふ事なり」(「めつらしや」の注)、『混効験集』に「珍敷勿論也　所によりて床敷と云心にも通ひり」がある。語は、新鮮な感動で対象を称えるときに使われる言葉であるようだ。恵原義盛の『奄美の方言散歩I』[17]に古老たちの近年までの正月の挨拶に、「メィジラサン　シュウグヮチ　ダリヲッカ」があったことを述べている。これなども、「めつらし」の原義を探るうえで大いに参考になろう。オモロでは「一きこゑさすかさか　かくらよりかゑて　しよりもりめつらしや／又とよむさすかさか　おほつよりかゑて　またまもりめつらしや」(一聞ゑ差笠が　神座より帰りて　首里杜珍しや／又鳴響む差笠が　おぼつより帰りて　真玉杜珍しや、七―三六一)などが、語の原義がよく表われているか。霊力を更新するための異郷での忌み籠もりを遂げた神女が、再び現世に舞い戻って来た時の眼

差しによってとらえられ祝福された此岸の姿が、「めつらしや」である[18]。「めつら」も下接の美称語の用例のほかに「めつらひやし」（珍ら拍子）、「めつらみやふ」（珍ら屛風）など、上接の美称語の例もある。次の「きよら」は清しの語幹。オモロを含めて琉歌その他でも、美しいものの形容として最も一般的に使われる語である。『混効験集』には、「美麗なる心なり　清の字を書」とある。後でも触れるが、下接の美称語として用例が多い。①に分類しておいた「いたきよら／たなきよら」も、そのひとつである。上接の例も「きよらけ」（清ら木）、「きよらておりとみ」（清ら手織りとみ）がある。「とゝろ」は、動詞轟くの語幹。鳴響むと同様な意味をもった語であろう。しかし、鳴響むが普遍的一般的なのに対してこれは用例が少ない。「まさり」は勝るものの意。この語は、鳴響むと同じぐらいに用例が多く、普遍的な広がりをもったものである。オモロでも下接の美称語の例も多い。①に分類した「ともまさり」も、そのひとつ。接頭語の用例には「まさりきよ」（勝り子）がある。「とくまさり」は、『歴代宝案』の中の船名にも見られる（「一四六三年八月、尚徳から中国へ奏文」他）。「―とみ」の例にも「まさりとみ」がある。「―ゑらひ」は、詳しくは後述するが神によって選び抜かれたものの意。「もゝ（百）／やそ（八十）」、つまり多くの選び抜かれたものという意の美称語よりも、「もゝ／やそ」の中から選び抜かれたものという意の「異名」か。「たから」は、まさしく宝の意。「たから」の用例は少ない。貴重なもの、大切なものぐらいの意か。関係するか分からないが、棺の忌み言葉にタカラムンというのがある（『沖縄語辞典』）。棺は船でもあるが、

関係しないか。「田名文書」の中の嘉靖二年（一五二三）の辞令書に、「たから丸」という船名が見られる(19)。

順をおって「―もとろ」「―とよみ」「―めつら」「―きよら」「―とゝろ」「―まさり」「―ゑらひ」「―たから」をみてきたが、これらは多くが「うら」（浦）、「うき」（浮き）「うけ」（浮け）などに下接して美称語を形成する語だということができる。また、「―とみ」もこの形の船名が『歴代宝案』には一例もみえないことを考えると、これも元来はこれらと同質の語だといえようか。すなわち、「―とみ」という語は『おもろさうし』の中で、あるいは引（ヒキ）を称える特殊な語として使われるもので、一般的に船を表す「丸」とは違う、美称語のニュアンスを多分にもっている言葉だと思われるのである。それはともかくとして、船を表す「異名」が『おもろさうし』において三〇例も確認されるのである。「―とみ」の形のものを加えれば、その数は五〇余りもあるということになる。『おもろさうし』巻一三に「船ゑとのおもろ御さうし」二三六首があるように、船は日本や中国・朝鮮・東南アジアの交通の手段として、または王国内の交通の足として使われたものだった。そして、さらには想念の世界で神女達が異郷へ赴く乗り物としても謡われているのである。その船をオモロは様々に言葉を換え、言葉を尽くして誉め称えているのだということができる。

〈二〉

しかし、オモロでは美称語によって誉め称えられるものは、当然ながら船ばかりではない。重要な祭具である鼓や幡・笠（冷傘）・扇、そして建物（蔵・殿・家・門）なども様々な「異名」、美称語によって称えられているのである。次に、幡・笠・扇と鼓の「異名」がでてくるオモロを引いてみる。

［例二　一―三七］

かくらとよてかふし	かぐらとよでがふし
一きこゑ大きみきや	一聞得大君が
とよむせたかこか	鳴響む精高子が
とよまちへ　みおやせ	（鳴響ましてみおやせ）
又なさいきよもいあんしおそい	又成さい子思い按司襲い
あかかいなてあんしおそい	吾が掻い撫で按司襲い
又けおのうちのもちよる	又けおの内のもぢよる
もちろうちのもちよる	もぢろ内のもぢよる
又国きよらは　あおらちへ	又国清らは煽らして
あけめつら　あおらちへ	朱珍らは煽らして
又なりとよみ　うちあけて	又鳴り鳴響みは打ち揚げて
なりきよらは　うちあけて	鳴り清らは打ち揚げて

又大きみは　いきよて
　きみ〳〵は　いきよて
又けおのより　おれわちへ
　もちろかちへ　あすへは
又けらへ大ころた
　さにしらんころ〳〵
又あよそろて　そこて
　きもそろて　そこて
又いつこ　このみしま
　くはら　このみくに
又あかなやり　おれわちへ
　やしなやり　おれわちへ

又大君はいきよて
　君々はいきよて
又けおのより降れわちへ
　もぢろかして遊べば
又げらへ大ころ達
　算知らんころころ
又あよ揃てそこて
　肝揃てそこて
又いつ子此の御島
　くはら此の御国
又あがなやり降れわちへ
　養やり降れわちへ

オモロは男が祭祀の準備をし、神女を神迎えするという祭りの叙事を謡ったウタだろう。おそらく、聞得大君が謡う主体者になっているオモロで、国王「成さい子思い按司襲い／吾が掻き撫で按司襲い」が幡を煽らせて鼓を打ち鳴らして祭りの準備をし、大君を神迎えして神女達が神遊びすると、「大こ

ろ／ころ〳〵」（身分の高い男・身分の低い男か）の心は一つになって喜んでいる。その「いつ子／くはら」（「大ころ／ころ〳〵」を含めた人々か）のいるこの現世を大切にし養うために大君たちはお降りなさるというのがウタの大雑把な内容である。幡と鼓の「異名」は、それぞれ「国清ら／朱珍ら」、「鳴り鳴響み／鳴り清ら」だが、神である大君達を迎えるために国王が祭りの用意をする、その叙事の部分に幡と鼓が「異名」で表れ、称えられているのである。鼓や幡・笠・扇は祭りの重要な祭具であり、これも様々な「異名」として登場し称えられるのである。

はじめに、鼓の美称語から示してみる。鼓は「あやつゝみ」（綾鼓）、「おもろつゝみ」（おもろ鼓）、「もゝくちのつゝみ」（百口の鼓）などとでてくるが、以下のような美称語で出所する。

なりとよみ／なりきよら（鳴り鳴響み／鳴り清ら、一―三七）、なりかなし（鳴り加那志、二―八二他）、なりおそい（鳴り襲い、一三―七八二他）、「もゝくちのつゝみ」／八そくちのなりきよ（百口の鼓）／八十口の鳴り子、一二―七〇二）、なりきよら／なよす（鳴り清ら／なよす、七―三九一他）、きゝかなし（聞き加那志、八―四三四）、こへかなしなりきよら（声加那志鳴り清ら、一三―八二七）、よせうち／なりよふ（寄せ打ち／鳴り呼ぶ、八―四五五）、なるし（鳴る子、一二―六八六他）、ちやくるわし（一六―一一五七）、みのかわ（みの皮、一一―五七八他）、くにとよみ（国鳴響み、一一―五九一他）

以上、鼓の美称語は一四例に及ぶ。オモロにおいて唯一の楽器が、鼓であった。それゆえに、オモ

ロは多くの美称語でこれを称えているのである。次に、同じ祭具である幡・笠（冷傘）・扇の美称語をあげてみる。これも、オモロでは「あおりかさ」（煽り笠）、「あからかさ」（赤ら笠）などと出てくるが、多くは美称語で登場するのである。また、幡や扇を直接示す普通名詞はオモロには出てこないが、例えば元旦の朝拝儀礼には首里城北殿正面に五旒旗が立てられることがわかっているし[20]、有名なイジャイホーを例に引くまでもなく扇も祭りにおいて神女が持つ重要な採物である。これらも、「かさ」と同様、「異名」としてオモロに謡いこまれているのである。

国きよら／あけめつら（国清ら／朱珍ら、一―三七）、あおりや／ておりや（煽りや／手織りや、一―三八他）、み物きよら／国ふさい（見物清ら／国相応い、三―八九他）、あけめつら／てよりきよら（朱珍ら／手織り清ら、三―九一）、くにあかり／きみしない（国揚がり／君撓い、四―二〇六他）、くにとよみ／くにめつら（国鳴響み／国珍ら、七―三六七）、あけなおり／〔あおりかさ〕（朱直り／〔煽り笠〕、九―五〇八）、みあおり（御煽り、一二―六八四他）、けよよせ／やゝめつら（ケオ寄せ／やや珍ら、一二―七二七）、うみなおし／なみおそい（海直し／波襲い、一三―八五三）

幡・笠（冷傘）・扇の美称語は、以上一七例である。いずれも煽らす、押し立てる、取る、揺らすなどに続くものだが、「あおりかさ」（九―五〇八）と対句になっている「あけなおり」を除いて、他の例は美称語どうしの対句がほとんどであり三者の区別がつけられない。それはともかく、これら

も鼓とおなじく祭祀には欠かせぬ道具として、オモロに多く謡われている。

もうひとつ、建物（蔵・殿・門）の「異名」を示す。これも、蔵は「御くら」（御蔵）、「さかくら」（酒倉）、「もゝくら」（百蔵）、殿は「おとの」（御殿）、家は「といろや」（十尋家）、「八いろや」（八尋家）、門は「いちやちや」（板門）、「かなちや」（金門）、「あまゑのちやう」（歓ゑの門）、「すへのちやう」（精の門）などの用例をみるが、多様な美称語でも出所するのである。

よりみちへ／せちよせ（寄り満ちへ／セヂ寄せ、一―四〇他）、きみほこり（君誇り、四―一九五他）、きみよせ／きらくせ（君寄せ／きら寄せ、五―二二五他）、みいきよせ／せんよせ（御酒寄せ／せん寄せ、五―二二九）、もゝうらおそい／世そわり（百浦襲い／世添わり、五―二五〇）、よせなみ／ともよせ（寄せ並み／とも寄せ、九―四八一）、とくよせ（徳寄せ、一一―六〇三他）、世そわり／つみつけ（世添わり／積み付け、一二―六六二）、つみあかり／そへつき（積み揚がり／添へ継ぎ、一二―六七二他）、たまよせ／よりたち（玉寄せ／寄り立ち、一二―六七七他）、きみきや世ねん／ぬしきや世ねん（君が世ねん／主が世ねん、一二―七四一）、むつまた（六股、一四―一〇〇二）、ま物よせ／さすかおそい（真物寄せ／差すが襲い、一六―一一三一）、やつまた／よりたち（八股／寄り立ち、一六―一一六〇）、とくみつ（徳満つ、一七―一一八六）、世まさり（世勝り、一八―一二五一他）、しまよせ／さとよせ（島寄せ／里寄せ、二〇―一三三八）、きみよし／よほこり（君寄し／世誇り、二〇―一三四一他）、くによせ（国寄せ、二〇―一三四六）、よりきよら／よ

りみちゑ（寄り清ら／寄り満ゑ、二一―一五〇一）、ゑんけらへ／むかけらへ（ゑんげらへ／むかげらへ、一一―五五九他）、けさけらへ（けさげらへ、一三―七八五他）、せくたち（せく立ち、一八―一二七四）

用例は全部で、三五例。このうち、首里城に関連する建物である「よりみちへゑ」（国王一家の日常食を調理するといわれる台所）、「もゝうらおそい」（正殿）、「よほこり」（七―三五一、御内原にあった世誇殿）、「きみほこり」（奉神門）は、特定の建物を示したものと考える方がよいだろう。鼓、幡・笠（冷傘）・扇、建物（蔵・殿・家・門）の順にその「異名」をみてきたが、それぞれが様々な美称語で謡われていることがわかる。オモロは、祭祀のなかで繰り返し謡わなくてはならない重要な対象物を、様々な言葉で謡いこみ誉め称えているのである。

〈三〉

ところで、先にあげた美称語をみていくと、その表現がそれぞれの対象に固有な言葉で構成されているものと、対象を越えた共通した表現によってできている語とがあることがわかる。例えば、船の美称語の例でいえば前者の典型的な例は③や④に分類したものである。船のもっている固有なイメージによる命名は、当然のごとく独特な表現になってくる。また、①の船の部分を誉めた命名もこの例になろう。さらに、造船にかかわった語で命名された②の「はきあかり」もそうであろうし、⑤に分

類されている多くの美称語を構成している「うき—」（浮き）などもそれであろう。これを鼓の例でいえば、「みのかわ」などは「みの」がわからないがおそらく材料による命名の例であろうし、「なりよふ」はまさに鳴り呼ぶものという意からきたものであろう。さらに、多くの鼓の美称語を構成している「なり—」は［鳴る］を意味する語である。船が［浮く］に対して、鼓は［鳴る］なのである。さらに鼓の場合はもうひとつ「—かなし」「—おそい」「—きよ」「—し」というように一般に神や貴人に付く敬称が付いた「異名」があるのも特徴だろう。これはおそらく、鼓それ自体を霊的な力の宿った人格的なものとしてとらえていたということなのか。では、幡・笠（冷傘）・扇の美称語はどうか。これは、船や鼓に比べて対象の具体や実態を示した表現が少なく修飾的な表現がより強い美称語だという気がするが、「あおり」（煽り）や「あけ」（朱）が固有な言葉であろうか。［煽る］はまさに煽られている状態そのものが霊力を受け、セヂのみなぎっている状態なのである。また、［朱］はこの色が霊が憑り着いた印の色(21)としてあるのであろう。しかし、前述したとおり幡・笠（冷傘）・扇の美称語は、全体的に実態性を表した表現が比較的少ない。これは、やはり興味深い。対象によって、実態性が比較的に表れた美称語群と、そうでない語群とがあるということである。それは、対象のもつ性質そのものによるということなのだろうか。つまり、幡・笠・扇は、祭祀のまさに装飾そのものとしてあったということなのだろう。最後の建物を示す美称語は、どうか。「やつまた」（八股）「むつまた」（六股）、「つみあかり」（積み揚がり）「つみつけ」（積み付け）などが、その形状か

ら名付けられた美称語だろう。柱を「また」と表現しているのは面白いが、「やつまた」「むつまた」は冒頭でも示したごとく他の古謡類にも穀物を蓄える高倉の美称語としてみることができる言葉である。そして、建物を示す美称語を構成する語として多用されているものは、「よせ」「より」「みて」があげられよう。「寄る」「寄す」「満つ」は、霊的な力、もしくは貢納物や財宝がより寄せ、より満ちるところの意であろう。これも、建物を意味する美称表現として固有なものとして考えてよい。

一方、各語の「異名」として共通に出てくる語は、どのようなものがあるのか。つまり、美称語化する語とでもいうものはどのようなものか。それは、船を示す美称語で⑤に分類したようなものだということになるだろう。もちろん、⑤にでてくるものがすべてそうであるわけではないが、例えば、「—とよみ」は「きみとよみ／うきとよみ」「うらとよみ」「なりとよみ」「くにとよみ」、「—きよら」は「いたきよら／たなきよら」「うききよら」「なりきよら」「国きよら」「み物きよら」「てよりきよら」「よりきよら」、「—めつら」は「おきめつら」「たまめつら」「くにめつら」「あけめつら」「やゝめつら」、「—まさり」は「ともまさり」「とくまさり」「世まさり」などの例が確認できて、これらが船、鼓、幡・笠・扇、建造物の異称を構成する語としてあることが分かる。加えて、「—とよみ」にはこのほかに何かの美称語かと思われる「いみやとよみ／いみやまさり」(今鳴響み／今勝り、一三—九五五)があるし、「—きよら」には米の美称語である「いしきよら」(石清ら、一二—七二三)、酒の美称語である「たりきよら」(垂れ清ら、一二—六九八)、神や人(神女・

国王）を表す語に下接してそのものを称えた語を構成している例「かみきよら／のろきよら」（神清ら／祝女清ら、一〇—五三〇）、「天かなし／てにきよら」（天加那志／天清ら、一〇—五一三）、「てたきよら」（テダ清ら、一五—一〇七五）、神女名を作る語を構成しているもの「くせきよら」（奇せ清ら、一九—一三一七他）、「そてきよら」（袖清ら、一三—八三八他）、「たけきよら」（丈清ら、一六—一一四九他）、「まきみきよら」（真君清ら、三—一〇〇他）、「世〻きよら」（節々清ら、一五—一一〇一他）、「わかきよら」（若清ら、一九—一二八四他）、内容がよくわからない「や〻のきよら／み物きよら」（ややの清ら／見物清ら、一四—一〇一二）、船の修飾語になっている「よりきよらおうね」（寄り清ら御船、一二—七〇九）がある。また、「—めつら」には神衣装の美称語「いとめつら／玉めつら」（絹珍ら／玉珍ら、一〇—五一五他）がある。「玉めつら」は船の美称語としてもあったが、「玉」「めつら」という美称語どうしで構成される言葉は、一語のみの美称語を示すわけではないということがわかる。「—まさり」には建物か船の美称語「すへまさり」（精勝り、一四—一〇三〇）、人名を構成している例「おとまさり」（弟勝り、二〇—一三六四）、「のちまさり」（命勝り、九—四七六他）、神女や国王、祭場を修飾する語の一部を構成したもの「くにまさりおやのろ」（国勝り親祝女、一三—九五九）、「けおまさりあちおそい／ふたまさりあちおそい」（ケオ勝り按司襲い／フタ勝り按司襲い、四—一七六）、「世まさりかみや」（世勝りが庭、一四—一〇五〇）、「世まさりのおきやか」（世勝りのおぎやか、五—二五三他）、何かの美称語か修飾語であると

思われるもの「いみやとよみ／いみやまさり」（今鳴響み／今勝り、一三―九五五）、「いろまさり」（色勝り、一三―九七九）、ある儀礼的行為を表しているかと思われるもの「くにまさり」（一一―六二一他）などがある。前に「玉めつら」を見たように「世まさり」も建物、祭場、国王の美称語ないしは修飾語として、広い用例があることがわかる。このほか「ておりや」も船と幡・笠・扇に共通してでてくる「異名」である。

ほかに⑤であげた例でいえば、「―とゝろ」には日の出の太陽の若々しい輝きを称えた表現「天とゝろ／あめとゝろ」（一〇―五一一）があり、「―もとろ」には霊力に満ち溢れた夜明けを称える語「あけもとろ／やもとろ」（明けもどろ／やもどろ、一三―九七五）、おなじく夜明けのその瞬間の霊的な時間を称えた言葉「あけまもとろ」（明け間もどろ、一三―八二五）、美しい衣装の美称語かと思われる「あやもとろ」（綾もどろ、一一―五八三）がある。「―ゑらひ」も、接頭語「ゑらひま人」（選び真人、一五―一〇六〇）のほかに、下接語の例「あちゑらび」（按司選び、一三―八一五）、「かみゑらひ」（神選び、一六―一一五二）、「たちゑらひ／すちゑらひ」（たち選び／筋選び、一四―九八三）、「ゑかゑらひ」（吉日選び、四―二〇五他）がある。「―ゑらひ」は、～より選び抜かれたものという意の下接語だろう。

つまり、⑤に分類した語は下接し様々に美称語を生成する言葉であったのである。これらは、まさに〝誉め言葉化する語〟、〝下接する誉め言葉〟とでもいう語である。実はオモロには、ほかにもこ

のような語があるのである。その例をいくつかあげてみる。

〈四〉

最初の語は、建物の美称語の用例に出て来た「—けらへ」（—げらへ）である。次に鼓、幡。笠。扇の美称語に出てきた「—かなし」、「—おそい（へ）」、これと同様な用例をみる「—おもい（ひ）」（—思い）という語である。

まず、「—けらへ（ゑ）」であるが、この語は『混効験集』に「けらいて　造営并調和の事也」（四）と注が施されているものである。日本古語との対応は不詳だが、「けらへ（ゑ）て」、「けらへよる」（げらへ居る）、「けらへわちゑ」（げらへおわして）などの用例をもっていることから、下一（二）段活用の動詞「げらへる」の語幹であろうと思われる。「けらへ」について『辞典』はどういうわけか「造営并調和の事也」のうち、もっぱら「造営」の注だけをとって造る意にしているが、これではなぜ美称語になったのか解釈できない。この言葉は「造営」と「調和」の意味とがともに合わさったもので、しかも〈生産叙事〉表現を形成する有力な語であることから、調和した理想的な状態に作り整えるという意くらいの語であり、それが転じて美しい、あるいは素晴らしいという意の美称語となった言葉である。接頭の美称語例は、「けらへあやつゝみ」（げらい綾鼓、一二—六六九他）、「けらへみやうふ」（げらへ屏風、九—四七九）、「けらへくにきよら」（げらへ国清ら＝神女名、一六—

一一五六八)、「けらへやまくすく」(げらへ山城＝地名、一三―七七四)などと多出するが、下接する美称語も前述した建物の美称語と思われるもの「ゑんけらへ／むかけらへ」「けさけらへ」のほかに、米の美称語と思われるもの「よきけらへ／きみけらへ」(雪げらへ／黍げらへ、一五―一〇八五他)、神女名と思われるもの「きみけらへ／ぬしけらへ」(君げらへ／主げらへ、一四―一〇四一)などがある。次の「―かなし」は、日本古語と同じく「かわいい。愛らしい」意の形容詞「カナシャン」の語幹である。この語は、接頭語の形で「かなしおとん」(愛し御殿、六―三三七)や「かなしきみはゑ」(愛し君南風、一一―五六一他)などの用例をみるが、多くの用例は下接する美称語の例である。鼓の「異名」、「きゝかなし」「なりかなし」のほかに馬の美称語「のりかなし」(乗り加那志、八―四三五他)がある。この他に敬称になっていると考えられる「あんしかなし」(按司加那志、一三―八七一他)、「かみかなし」(神加那志、九―五〇八他)、「のろかなし」(祝女加那志、一〇―五三〇他)などの例や、神女などの名の一部になっている例「あけかなし」(あけ加那志、二―五八)、「よきかなし」(雪加那志、一三―九五五)「みそてかなし」(御袖加那志、五―二三五他)などがある。「―かなし」の用例は基本的には神や貴人、もしくは神格を意識したものに下接したもので、それが転じて名の一部になったものがあると考えてよかろうか。いずれにしろ、折口信夫が「日琉語族論」[23]において「かなしは可愛いだが、尊敬すべきものと直に変化したものではない。思ふに『神によつて愛せられるもの』と言つた考へ方から、『さうした神鍾愛の人』と言ふによつて、

特定の人をさし示し、神の恩寵に与らせ、禍から守ろうとした」と述べているのは、極めて重要である。「―かなし」が下接する美称語や敬称になったり、名の一部になったりしているのは、折口のいうように始原的にはこれが神を視点とする語だからである。同様のことは、前述した「―ゑらひ」や「―けらへ」にもいえるだろうし、これから述べる「―おそい」や「―おもい」についてもいえるだろう。

「―おそい」は守護する、保護するの意、近代風に解すれば支配する意の動詞〔襲う〕の名詞化したもので、オモロの用例は非常に多い。前に述べたように、始原的に神が守護しているもの、神に守られているという意味の語であるのだろう。用例は、神女君南風を修飾した「おそいきみはゑ」（襲い君南風、一一―六四一他）、下接語の例は、前述した鼓の美称語「なりおそい」、おそらく幡の美称語だと思われる「うみなおし／なみおそい」のほかに、ほとんどの用例が国王を示す「あち（あんし）おそい」（按司襲い、一―四〇他）、神女名を構成している「きみおそい」（君襲い、二〇―一三五八他）、「くにおそい」（国襲い、一一―六〇九他）、地名そのものを構成している「うらおそい」（浦添、一五―一〇七〇）、久米島中城（宇江城）の美称語「しまおそい」（島襲い、一三―七七二他）などがある。「―おそい」の用例は、比較的に一般的な美称語というより、それが固定化して固有名詞化している傾向がある。これは、注目される。「―おもい」も、やはり神が視点となっている語で神が思っているもの、神に思われているものという意の言葉だろう。『辞典』では「おもい」につい

て、「思うことの意味から思い人、愛人を指すようになり、転訛して慣用的な美称辞としても使われるようになる」とあり、また「おもいくわ」（思い子）の項でも方言ウミングヮに引き付けて「愛児。御子。若君。主として他人の子に対する敬称」としているが、近代の用例に即し過ぎた解釈である。第一に「おもいくわ」は、神女との対句例（一一―五六七他）もあって「愛児。御子。若君」では片付けられないし、この語が接頭・接尾の美称語になぜなることができるのか説明できない。「おもう」は、神の心の内、思慮の中にあるものというような語かと考えられる(24)。「おもい」の接頭語の用例は、「おもいきみ」（一二―六九〇他）、「おもいくわ」（思い子、一三―八三三他）、「おもいなよくら」（思いなよくら、一一―六〇二他）、「おもいまかもい」（思い真嘉思い、八―三九六）など多数あるが、下接する例もまた「きむたかおもい」（肝高思い、一一―六四二）、「ちやなおもい」（謝名思い、一四―九九六）、「いくさもい」（戦思い、一三―九〇八）、「おきやかもい」（おぎやか思い、一―四他）、「おやくもい」（大親子思い、二一―一四二八）など、これも多数の固有名詞や一般名詞を構成する語として出てくるのである。「―おもい」の用例は、ほとんどすべてが神や貴人を示したもので、「―おそい」に比べるとさらに固有名詞化がはなはだしく、今までみてきたような一般的な美称語を形成する言葉とは、異なったものといえるかもしれない。実は、「―おもい」の用例は実際の童名などに使われている。とすると、いままで扱ってきたほとんどの語が、オモロ以外にあまり多く用例をみない特殊な言葉であると考えると、やはりこれは、質の違う側面をもった語だ

ということができようか。

まとめ

以上、いままで船の異称をはじめとして、鼓、幡。笠。扇、建物の異称をとりあげてきた。認定のしかたにもよるが、船の異称だけで三〇（「—とみ」の例を入れると五〇あまり）、鼓が一四、幡。笠。扇が一七、建物が三五にも及んでいる。オモロは、重要なものを様々な異称で称えているのである。その異称を細かくみていくと、具体的な対象の実態に即した語群と、個別の実態を越えた、いわば異称を形成する言葉とでもいう語群とがあることがわかる。ここで注目されるのは、異称、つまり美称語をかたちづくる言葉である。それらを、用例から抽出してみると、「—とよみ」「—きよら」「—めつら」「—まさり」「—とゝろ」「—もとろ（る）」「—ゑらひ」、そして「—けらへ（い）」「—かなし」「—おそい」であった。これらは、ほとんどの語が上接するかたち（接頭語）をもちながら、いずれも下接する美称語であることを特徴としているのである。この下接する美称語こそが、オモロの「異名」を形成する重要な言葉であった。

折口信夫は、先に引用した『日琉語族論』において「古代日本語の習慣で言ふと、『愛しき何某』もつと古い言ひ方だと、語根風になつたかなしを用ゐて『愛し何某』と言ふ所だ。日本語琉球語の接近性から言へば、『何某かなし』は、さうした『かなし何某』の逆語序だと言つてよい」とのべてい

る。折口は、このほかにいわゆる愛称辞・卑小辞の「ぐわあ」「がま」、「おもひ」(思ひ)、「しられ」(知られ)などをあげて、これらも通常の日本古語の「語序」と逆になっているもの、すなわち「逆語序」だとしているのである。そして、「逆語序」は琉球語だけの特殊ものではなく「日本語における古い別殊の語序」だとして「南方諸語族との比較」を考えていたようだが、先にあげた下接の美称語は確かに通常の修飾関係が逆さになっている、折口がいうところの「逆語序」だということになろう。これを、折口が述べているような「南方諸語族」と比較するにあたいするものかどうかということだが、今まで述べてきたようにこれらのほとんどのものが美称語を形成する言葉であることを考えれば、これらの多くはむしろウタの表現、あるいは神名やそれに準じた人名(童名)、位階名などにみられる特殊な言葉だと考えるのが、妥当だろう。つまりは、歌語的なもの、神語的なものといってよい言葉である。これを、古層のものとみなすかどうかであろう。筆者は今のところ、むしろこれらは基本的に王権の周辺で発達した歌語や神語などで、新しい表現ではないのかと考えている。下接する美称語は、折口があげた神名や人名、位階名などを除いて、他の歌謡類に多くみられるものではないのである。これらは、敬語や修飾語を発達させたオモロの表現の特徴のひとつとしてあるものであり、しかも、美称語をかたちづくる一種の方法としてあったというようなものなのである。そう考えると、折口のいう「逆語序」は、はたして古層の日本語としてとらえられるものなのかどうか疑問になる。

先に美称語の中には、「たまめつら」が美しい衣装と船の美称語、「世まさり」にあっては建物や祭場の美称語や国王の修飾語、「ておりや」が船と幡。笠。扇の美称語、「くにとよみ」が鼓や幡の美称語、「きみとよみ」が船の美称語と神女名としてあることを述べた。さらに、「よりきよら」が建物の美称語や船の修飾語（一二―七〇九）、「きみよし」が建物の美称語と神女名（一一―五七二他）などとしてあって、同じ美称語が必ずしもひとつの対象のみの異称ではないことを述べた。また、ほかにも内容のはっきりしない美称語、ないしは修飾語「いみやとよみ／いみやまさり」、「いろまさり」、「くにまさり」、「やゝのきよら／み物きよら」（一四―一〇一一、なお三―八九他の「み物清ら」は幡。笠。扇の美称語）があることも前述した。オモロには、このほかにも内容のよくわからない美称語が多いが、それらは語義そのものが不明なために解釈できないものではないのである。すなわち、構成しているそれぞれの言葉の意味はわかってもそれがものの具体性を指示した言葉ではなく、誉め言葉そのものであるために、どのような対象を示しているかわからないという言葉なのである。これが、オモロをわかりにくくさせている原因のひとつであり、逆にいえばそういう表現になっているウタがオモロであるということができるのである。本稿では、それでもなるべく美称語の対象を特定なものに絞った解釈してきたが、それにもかかわらずひとつの異称が複数のもののそれになっているものがあることは、前述したとおりである。実は、『辞典』（索引）などは例えば「なりきよら」が、鼓、雨、鈴の美称語（本稿では、すべて鼓の美称語とした）として、「すつなり」が、鼓、船の

美称語、及び神女名（本稿は、すべて神女名とした）として解釈され、ひとつの言葉が多様な語の美称語、もしくは固有名詞としてとらえられている。ここでは、それらについて『辞典』の解釈に従わなかったが、述べてきたようにオモロのある美称語が一語のみのそれではないことは事実である。オモロの言葉には美称語に代表されるように、指示しているものの具体性・実態を表さず、誉め言葉が先行してしまっているようなものがあるということである。そのような質をもった言葉が発達しているオモロは、したがって理解しにくいウタであるということになる。

折口がいう「逆語序」とは、まさしくそのような美称語であった。オモロは、第二節だけのウタが全体の約半数を占めるなど、叙事的な歌謡にあって極めて短形化が進んだウタであることは、既に指摘されているところである。そのようなウタにあって、敬語とともに美称語が発達していることは注目される。すなわち、オモロは王権のウタ、宮廷歌謡としてあったのであり、叙事的な表現の祈願詩化（もしくは叙情詩化）と美称語や敬語の発達とは、一連のものであった。つまりは、対語対句によってハレの言語を形成した一般の叙事表現に加えて、美称語を豊かに発達させた表現世界を形成したのがオモロの言語であったのである。その有力な美称語の方法、歌語の方法が、折口のいう「逆語序」であった。これが、王権の周辺で発生した新たな言葉であったと考える所以である。

〈注〉

(1)「言葉聞書」には、「石垣之異名なり」（「ましらご」の注、三―九一）や「舟の異名也」（「ゑそこ」の注、三―九五）というように「異名」という注記が付いた箇所が二八例出てくる。外に「かへし名」（「たたみきよ」の注で「按司かへし名也」一―三一）が一例、「替名」（「たゝみきよ」の注で「右同替名也」四―二〇五、「ねはの、おゑつき」の注で「同替名也」八―四三六）が二例、「かいし言葉」（「くせせりきよ」の注で「おなりかみのかいし言葉也」五―二二一）、「返し言葉」（「まちらす」の注で「くしかわの返し言葉なり」一六―一一六六）が一つずつある。「たたみきよ」の例で分かるとおり、「かへし名」と「替名」は同じもので「替名」は「かへし名」と読ませるのだろう。「かいし（返し）言葉」も含めて、この五例（実質四例）は、いずれも意味上同格的な対句を表していることから、「異名」とは内容が異なるものであると思われる。また、「言葉聞書」に先行しこれと連続していた仕事であった『混効験集』の注記には「返しの詞」という注が一三例、「反詞」が一二例あり（どの例も坤巻にある）、「言葉聞書」の「かいし（返し）言葉」「かへし名」「替名」に近い内容かと思われるが、どういうわけか「異名」という注記は見当たらない。前述したように、『混効験集』と「言葉聞書」とは連続した注だが、なぜこのような違いが出てきたか、今後の課題としたい。

(2)田畑英勝・亀井勝信・外間守善　角川書店、一九七九年。

(3)至言社、一九七八年。

(4)長田・須山名保子共編　笠間書院、昭和五二年。

(5)全集8　第一書房、昭和五六年。

(6)角川書店、一九八三年。

(7)国立国語研究所　大蔵省印刷局、一九六三年。

(8)全集7　第一書房、昭和五五年。

(9)『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社、一九八一年。

(10) オモロの引用は、比嘉実編『尚家本　おもろさうし』法政大学沖縄文化研究所、平成五年による。

(11) 拙論「オモロの表現 ―〈生産叙事〉の視点から―」(『沖縄文化研究』18、一九九二年)参照。

(12) 補訂版　大野晋・佐竹昭広・前田五郎編　岩波書店、一九九〇年。

(13) 語の解釈・認定は、いちいち断っていないが、外間守善・仲原善忠編『おもろさうし　辞典・索引(第二版)』角川書店、一九七八年と必ずしも一致していない。

(14) 高良倉吉『琉球王国の構造』吉川弘文館、昭和六二年。

(15) 砂川哲雄「南島歌謡における祝女の山ごもりと造船」(『八重山文化論集』八重山文化研究会、昭和五一年)参照。

(16) 船と神女のイメージの重なりはみたとおりだが、神女と鳥のイメージの重なりもあるのではないかと思っている。たとえば、神女の衣を「ゑかきみはね」(描き御羽、一三―八四三)といっているし、宮古島狩俣では神衣のことをパニ(新里幸昭「解説　狩俣部落の神祭りと年中行事」『南島歌謡大成　Ⅲ宮古篇』角川書店、昭和五三年、上地太郎『狩俣民俗誌』自家版など)というが、これは羽ではないか。とすると、神女が鳥としてとらえられていることになる。今後の課題としたい。

(17) 海風社、一九八七年。

(18) 関根賢司「鳥瞰幻想」(池宮正治篇『おもろさうし精華抄』ひるぎ社、一九八七年)参照。

(19) 池宮正治「『おもろさうし』における航海と船の民俗」(『新版古代の日本　③九州・沖縄』角川書店、一九九一年)参照。

(20) 真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社、一九八九年参照。

(21) 森朝男『古代和歌と祝祭』有精堂、一九八八年参照。

(22)沖縄県教育委員会『評定所本　混効験集』昭和五九年。
(23)全集19巻新訂版　中央公論社、昭和四二年。
(24)多田一臣は、「おもひ」について「主体の能動的な心のはたらきを示すことばであり、対象に作用してそれを現前させる呪力を意味することばであった」（『古代語を読む』桜楓社、昭和六三年　「おもひ」の項）としているが、参考になる。

《付記》

一九七一年夏、高校二年生だった私は同級生二人を誘って、オキナワへわたった。二週間足らずの旅であったが、その時の体験は強烈であった。卒業後の進路選択を迫られたとき、三年間の高校生活で一番印象に残っているのは、やはりオキナワだったと考え、そこで学生生活を過ごすことを決めた。私が通っていた高校（神奈川県立川崎高校）は、大学闘争の影響を受け、まだ学園紛争の余波があった。そこでは大学に進学すること自体が問われもしたが、私はせめて自分を納得させるために、高校三年間の帰結としてオキナワがあると思ったのである。オキナワでの浪人生活を過ごした翌年の七四年春、ようやく憧れの琉球大学国文科（正式には法文学部文学科国文学専攻）に入学することができた。浪人生活中に沖縄タイムスの連載記事「沖縄学の現在」を読んで琉球文学の存在を初めて知り、当初考えていた民俗学よりも、オキナワにある文学を勉強しようと漠然とではあるが、考えていた。しかし、入学早々から長いバスストがあり、当時「二中」裏に下宿していた私は、大学に通うだけで精一杯だった。そんな折、入学直後からアルバイトをしていた大学の図書館で、学者然としていた国文科の先輩に会った。私は先輩に、オキナワ関係の勉強ができそうな方言研究クラブと民俗研究クラブの様子を尋ねた。先輩は全く「公平客観的」にどちらも良いクラブだと答え、ただ方言研の方が国文科の先輩が多いとだけ付け加え

た。それならと、バスストがようやく明けた日、まずは方言研をのぞこうと部屋に飛び込むと、そこに図書館であった先輩が座っていた。先輩は前部長、名嘉真三成さん（現琉球大学教育学部教授）であった。図書館では全く方言研とのつながりを口にされなかったので、こちらはひどく驚いてしまった。しかし、こうして民俗研をのぞくこともなく、私は方言研の部員になった。

当時、部長は歌が上手で優しかった三年生の富浜馨さん。しかし、私が入部したとき二年生の部員はいなく、確か文化祭が終わると二年生以下で一番古い部員が私ということで、部長にさせられてしまった。方言、ゥワー（豚）とワー（輪）の区別もなかなかできないヤマトゥンチューの私が部長になったのである。ただ、そんな私でも部長が勤まる気になった最大の理由は、顧問でおられた仲宗根政善先生の存在だった。先生はいつも穏やかで優しく、どんなことでも受け入れてくださった。学生がなにかいうと、「ほう、そうかね」と笑みを浮かべて感心される。その後、少しずつ問題点を解説され、どの部分が未解決であるか指摘なさる。そして、それを解決するにふさわしいのは君であるというふうなことをおっしゃる。学生は、全くその気になってしまうのである。そんなやりとりを、研究室や教室や部室で、また先生のお宅でひらかれていたオモロ研究会で幾度となく見聞きしているうちに、私でもなにかできそうだと自然に思えるようになってしまった。先生は、巧まずして人をその気にさせる名人だったのではないかと思う。入学してしばらくしてから、オキナワとの異和とカルチャーショックに悩んでいた私だったが、オキナワとヤマトを結び、それを越えた普遍的な学問世界の存在を教えてくださったお一人が、仲宗根先生だった。

いつも優しかった先生であったが、一度だけしかられたことがある。それは、一年次のときで、その年が先生の退官される最後の年であった。私は、先生の授業がもう聞けなくなるかもしれないと方言研の先輩に教えられ、二年次からとることになっていた講義を聴講のかたちで聞きに行っていたのであった。その講義は、教養の授業であった体育の後で、教室に駆けつけてしばらくすると、強烈な睡魔に襲われる。ついうとうととし、そして大

胆にも机の上でうつ伏せに眠ってしまったとき、先生のおしかりがあった。「島村君、島村君、寝るんだったら教室の外で寝ていらっしゃい」。先生はほほ笑みながらおっしゃっていたように記憶しているが、声は随分厳しかった。私の睡魔は、一瞬にしてすっ飛んでしまった。課せられた授業ではなく、自ら進んで聞きにきたのに大胆にも机の上で伏して寝ている、そういう私の失礼で甘えた態度をしかってくださったのだと思う。

卒業してもオキナワを去りがたく研究生になってもう一年間勉強しようと思ったのも、精神的に苦しかった大学院生活を何とか乗り切ることができたのも、そして、神奈川県の高校の教員になって細々とではあるが学問を捨てずに勉強を続けているのも、多くが仲宗根先生に連なる色々な方々のおかげである。そしてもう少し考えてみると、その出発点は早い時期から先生になにかやれそうな気にさせていただいたからだと思えるのである。

本号では、オモロの美称語について書かせていただいた。拙論は、「オモロの言葉」（『国文学』第34巻1号学燈社、昭和六四年）の後段を詳説したものである。論文は折口信夫の「逆語序」に触れたように、一般の方言学や国語学にかかわったものではなく、あくまでも文学研究上の問題意識から書かれたものである。私は当初から文学の勉強をやろうと決めていたが、そういう私でも全く違和感なく暖かく受け入れてくださったのが仲宗根先生だった。特に、先生のお宅で週一度開かれていたオモロ研究会で学んだものは、たいへん大きかった。仲宗根先生を中心に、私が出席していた当時（一九七四年から七九年）、研究分野や関心の異なる池宮正治、高橋俊三、玉城政美、新里幸昭、故福地唯方、故島袋全幸、平山良明、嘉手苅千鶴子、故照喜名繁夫、桃原茂夫、宮城信勇、関根賢司、伊芸弘子、大城盛光、レオン＝セラフィム各先生方と学生らが、ざっくばらんに自由にいいたいことをいいあい、大事なものを共有していく、そんな豊かで楽しい研究会が、先生のお宅での会だった。その研究会の雰囲気を保証したのが、先生のお人柄だったといえる。

私も、その研究会で育てられた。まだ考えの足りない拙論であるが、本稿を先生の御霊に捧げたいと思う。